

2024年7月21日

説教題「あなたがたの間に」ルカによる福音書 17 章 11～21 節

主任牧師 加藤 誠

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものではない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ17章20-21節)

今朝は「重い皮膚病を患っている十人の人を癒す」という話と「神の国はあなたがたの間にある」という主イエスの言葉とを、一つのつながりある話として、そこに響いてくる大切なメッセージを聴いていきたいと思います。

まず 20 節からの言葉に目を向けると、ここでファリサイ派の人びとが主イエスに「神の国はいつ来るのか」と尋ねています。「神の国」とは「神の愛の働き」とか「神の平和」と言い換えることができます。ファリサイ派の人びとは「神の愛の働きと平和はいつ、どんな形で私たちに実現するのか？」と尋ねたのでした。例えば、今の私たちが生きている世界には神の平和からほど遠い悲しみがあふれていますが、そういう時に私たちは「神さま、いつ、いつなのですか？ あなたの平和はいつ、どのように実現するのですか？」と尋ねたくなる。その私たちの問いと、同じようなことをここでファリサイ派の人たちは主イエスに尋ねたのでした。

その問いに対し主イエスは「神の国は実にあなたがたの間にある」と答えられました。この「間」という言葉は「あなたがたの手の届くすぐ近くに」という意味です。「いつ」という将来ではなく「すでにもう、ある」「神の愛の働きも神の平和も、すでにあなたがたのただ中で、すぐそばで始まっている」と答えられたのです。いったい、それはどういうことなのか。主イエスが語られた「あなたがたの間」とは「どのような間」なのか。それを今朝、聖書から聴きたいのです。

まず一つ目。11 節「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」という、「間」です。サマリアとガリラヤは過去の歴史的経緯からお互いにいがみ合い対立していた間柄でした。つまり両者の「間」は火花が散るような「間」だった。その両者の「間」に、重い皮膚病の故にサマリアとガリラヤの双方から排除された人たちが肩を寄せ合い一緒に暮らしていました。誰も足を向けようとしない、そのような「間」を、主イエスは訪ねられたのです。直前のルカ 15 章には「失われた羊一匹」を探す羊飼いが出てきます。ルカは「迷い出た羊」と言わず「失われた羊」と言っています。本人の責任ではない。周りの人たちが「見失ってしまった一人」。その一人を探し出し、神の愛と喜びの礼拝に連れ戻すために、主イエスはサマリアとガリラヤの「間」に暮らす、重い皮膚病の人たちの小さな集落を訪ねられたのでした。「神の国」は十字架の主を通して、私たちの「間」にもたらされ、始まるのです。

主イエスはこのとき、どのようなメッセージを携えて重い皮膚病の人たちの集落を

訪ねようとされたのか。これは想像ですが、一つは「あなたがたはサマリアとガリラヤの両方の礼拝から排除されて悲しい思いをしているけれども、愛の神のまなざしはあなたたちに注がれている。あなたたちの祈りはちゃんと聴かれている」ということであり、もう一つは「サマリアとガリラヤ出身の者たちが一緒になって支え合い暮らしている、そのようなあなたたちのあり様は、神の国の先駆けのような大切な働きだよ」ということだったのではないかと思うのです。サマリアとガリラヤの双方の人たちが憎しみと憤り、不信のゆえに実現できていないことを、双方の「間」で暮らす十人の人たちは実現していたのでした。人として互いの悲しみを知り、心寄せあって支え合い、共に神に憐れみを願い祈る者とされていた。そのあり様を主イエスは祝福し励ますために主イエスは「サマリアとガリラヤの間」に足を運ばれたのだと思うのです。「実に、神の国はあなたがたの間にある」。ファリサイ派の人たちには見えていなかったけれど、「神の国」は彼らのすぐそばで、サマリアとガリラヤの「間」で、すでに始まっていたのでした。

そして主イエスが語られた「あなたがたの間」の二つ目。それは主イエスのもとの賛美と感謝を携えて帰ってきた「一人」と、返ってこなかった「九人」の「間」ということです。重い皮膚病を癒された十人のうち一人だけが、主イエスに感謝を伝えるために賛美しながら帰ってきた時、主イエスは言われました。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻ってきた者はいないのか」と。皆さんはこの主イエスの言葉をどう聴きますか。帰ってこなかった九人のことを咎めている響きを感じて心が痛みます。自分のことが問われているようで心が痛みます。自分は感謝と賛美をもって主イエスのもとの帰ってきているだろうか。感謝しながらも、まず祭司のところに行くことを優先する自分ではないかと問われます。病気の完治を祭司に確認してもらうことで家と村に帰ることができる。それは十人がずっと願ってきたことで、とにかく祭司のところに行きたいと思ったのでした。が、戻ってきた一人は主イエスに感謝と賛美をささげ、主イエスと喜びを分かち合うことを選び、主イエスから「あなたの信仰があなたを救った」という言葉をいただきました。神の国の祝福は一人で味わうよりも、二人または三人、主イエスと共に喜び、分かち合うものなのです。では、主イエスは帰ってこなかった九人の不信仰を責める嘆いているのでしょうか。十字架の上で自分につばを吐きかける者のために祈ってくださった主イエスです。主イエスは責めるよりも、他の九人が自分で気づいて、主イエスのもとの賛美を携えてくるのをずっと祈り続けてくださる方です。帰ってきた一人と、まだ帰ってきていない九人の「間」で祈り続けてくださる十字架の主なのです。この主イエスを通して「神の国」の神の愛と平和の働きは私たちの「間」に実現しているのです。この福音を大切に受けていきましょう。